かずさの博物誌

ヒレンジャク（緋連雀）

～ヤドリギの実が大好き～

文・写真／成田篤彦

「このケヤキや桜の木のヤドリギにヒレンジャクがやってきます」。

「え！そうですか？ぜひ、写真に撮りたいですね。いつ来るのですか？」

「春先です」と河川のほとりを通るときに野鳥観察のベテランの方と以前から会話をしていた。

しかし、昨年は現れなかった。だが、先月、メールが届いた。「ヒレンジャクが来ました」と。

早速、行ってみるとすでに友人が来ていて望遠レンズをつけたカメラを構えていた。

「あそこにいます」と遠方の山の頂に生える数本のケヤキの木を指差した。

「え！あんな遠くにいるのか。川岸の近くに彼らの好物のヤドリギの実がいくらでもあるのに」と思った。双眼鏡で丁寧に見ていくと中枝の途中にスズメよりやや大きい小鳥を見つけた。やや太めで、頭の毛が逆立っていた。尾の先端が赤色。ヒレンジャクだ。しばらくすると数十羽の群れで、上空を右方向へ一直線に飛びさった。その姿はムクドリと似ているが、やや小さめだ。

「あちらへ行ってみましょう。たくさんのヤドリギがついているケヤキがあるから」とベテランが言う。

行ってみると葉を落としたケヤキに黄緑色の大きなヤドリギがいくつもついている。ヤドリギには実があふれんばかりになっていた。

彼らはケヤキの枝からヤドリギの塊に飛び移り、淡い黄色の実を盛んについばんで呑み込んでいる。しばらくついばむとケヤキの枝に戻る。そして、またヤドリギにやってきて実を食べる。それを二～三羽ずつ交代しながら、繰り返していた。彼らはちょっと小太りで、薄いピンク色の白粉を塗ったような上品できめ細かい羽毛で覆われている。頭は黒とピンクの羽毛が勢いよく後ろに伸びていて、のど元が真っ黒である。目の周りに歌舞伎役者のような見事なくまどりがある。そして、つばさの肩やへりの部分が紅色や淡い空色で薄らと化粧している。尾の先端が緋色（濃く明るい赤色）で、腹側から見ると真っ赤だ。この尾の色が緋連雀（ヒレンジャク）の名の由来である。

彼らは気品ある形と模様と色彩をもち、野鳥愛好家が一度はお目にかかりたい魅力あふれる野鳥だと感じた。

さて、ヒレンジャクは上総には冬にやってくる。訪れる数十～五十羽の群れでやってくるが、年によっていちじるしく変わる。今年は上総以外でも千葉県の各地で訪れているとの話も聞く。

彼らはシベリア東部から中国東北部、アムール地方、ウスリー地方で繁殖し、日本などで越冬する。ノイバラ、カキ、ノブドウ、ツタ、ヤツデ、ヤドリギなどの果実を食べる。ことにヤドリギの実を好んでついばむ。ヤドリギの実は粘液を豊富に含んでいる。実はヒレンジャクの消化管を通り、種だけが排せつされる。このとき、粘液が種の周りについているので、ヒレンジャクが訪れる木の枝にヤドリギの種が粘りつき、発芽する。また、鳥の体内を通ることによって種は発芽しやすい状態になる。ヤドリギの実には毒があると考えられているが、ヒレンジャクには毒にはならない。このヤドリギとヒレンジャクの関係は長い進化を経て出来上がったものだが、それにしてもヤドリギの繁殖戦略の巧妙さに舌を巻く。

ところで、青空の下、葉を落としたケヤキのヤドリギにヒレンジャクが訪れて飛び交う上総の田園風景には早春のうち開かれた明るく広々としたおもむきがある。皆さんも一度、味わってはいかがでしょうか。

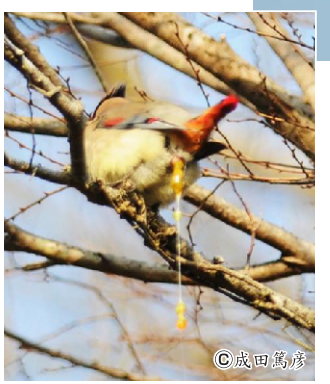
（千葉県立中央博物館友の会会員・木更津市在住）

〈参考文献〉矢崎武男1976「レンジャク」『静岡県の自然　四季の野鳥』静岡新聞社

▲ヤドリギの実を食べるヒレンジャク
2011年2月7日　木更津市＝成田篤彦撮影

ヒレンジャク▶
レンジャク科　全長約17.5㎝
冬鳥。シベリア東部から中国東北部などで繁殖。冬季に南に渡る＝2011年2月6日　木更津市＝成田篤彦撮影

▲飛翔するヒレンジャク
県内全域に記録がある。
2011年2月7日　木更津市＝成田篤彦撮影



◀ヒレンジャクのお尻
食べたヤドリギの種子が垂れ下がる。
2011年2月7日　木更津市＝成田篤彦撮影

◎写真・文章の無断転載を禁じます。